

ラベル付け理論による 指定的疑似分裂文の分析*

松 山 哲 也

1. 研究の背景

Akmajian (1970) 以来、疑似分裂文は、叙述的用法と指定的用法があることが知られている。Higgins (1979) によれば、(1) の疑似分裂文は、叙述読みと指定読みが可能である。

(1) What John is is silly. (Higgins 1979: 17)

叙述読みでは、述部の silly は、wh 節が指し示しているものの性質を表わし、「(ジョンがある立場や地位にいて) そのこと自体が愚かだ」と解釈される。一方、指定読みでは、述部の silly は wh 節が表す変項 (variable) の値 (value) を指定し、「ジョンの特徴は何かということ (それは) 愚かだ」と解釈される。前者を叙述的疑似分裂文 (predicational pseudoclefts (PPC)) と、後者を指定的疑似分裂文 (specificational pseudoclefts (SPC)) と言う。

両者は、(2) の連結性 (connectivity) の有無で統語的に区別される (Higgins 1979)。叙述読みでは、(2a) の wh 節内の主語 John が焦点位置にある himself を指示できないが、指定読みでは可能である。つまり、SPC は束縛に

* 本稿は、2023年3月4日に開催された日本英語英文学会第32回年次大会 (オンライン) で行った研究発表 (「英語の指定的疑似分裂文の単一節分析」) に抜本的な加筆・修正を施したものである。本稿の内容に示唆に富む有益なコメントを下された二人の査読者に記して感謝の意を表したい。また、本稿は、日本学術振興会・科学研究費補助金 (基盤研究 (C) [No. 21K00570]) に基づく研究成果の一部である。

関してあたかも *John saw himself in the mirror* の単文のように振舞っている。(2b) の束縛代名詞と (2c) の否定極性表現 (negative polarity item (NPI)) についても同じことが言える ((2a-c) は Bošković (1997: 256) より)。

- (2) a. What **John** saw in the mirror was **himself**. (*PPC/SPC)
 b. What **everyone** proved was **his** own theory. (*PPC/SPC)
 c. What John **didn't** buy was **any** pictures of Fred. (*PPC/SPC)

PPCのwh節は、自由関係節であるという見解が広く受けいられているが (Akmajian 1970, Bošković 1997, den Dikken et al. 2000), SPCのwh節もそうであるならば (Akmajian 1970, Iatridrou and Varlokosta 1998), SPCに連結性が生じる事実の説明が難しくなる。

Higgins (1979: 86) は, (3a) のSPCと (3b) のquestion-answer pairs (QAP) の平行性を指摘している。つまり, SPCのwh節 (下線部) がQAPの「質問 (question)」に, 焦点部分 (波線部) がQAPの「返答 (answer)」に相当する。

- (3) a. What did John buy? — some wine. (QAP)
 b. What John bought was some wine. (SPC)

この観察をもとに, den Dikken et al. (2000: 46) は, (4a) のQAPと同様に, (4b) のSPCも焦点位置に完全な節があると想定する。(4b) の焦点要素以外の要素 (*he bought*) がwh節内から復元可能であるという条件のもとで削除され, SPCが派生される。

- (4) a. What did John buy? — ~~he bought~~ some wine.
 b. What John bought was ~~he bought~~ some wine.¹

この分析は, (2) の連結性に自然な説明を与える。SPCのコピュラが (5) のように完全なIP節を補部にとり, その節内で再帰代名詞 (*himself*) が先行詞 (*John*) にc統御され, 連結性が捉えられる²。

- (5) [[What John saw ...] is [IP **John**-saw **himself**]]. (= (2a))

同じ説明は、(2b)の束縛代名詞と(2c)のNPIにも当てはまる。以下、この分析をden Dikken (2006)に従って削除分析と呼ぶ。

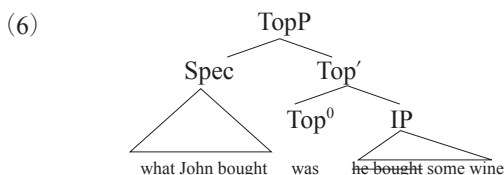
本稿の目的は、den Dikken et al. (2000)の削除分析の不備を指摘し、それらを解決するためのSPCの派生をChomsky (2013, 2015)のラベル付け理論をもとに提案することである。

2. den Dikken et al. (2000)

前節では、削除分析の要点を概観した。本節では、当分析が提案するSPCの統語構造を明確にし、それを踏まえてその利点と不備を考察する。

2.1. 削除分析

den Dikken et al. (2000: 45)は、SPCのコピュラは、意味を有さずに、wh節とIP節を関係付ける役割をもつ機能範疇として、(6)のようにTopP主要部を占めると想定する³。前提を表すwh節はTopの指定部を、その補部をIP節が占める。



IP節に削除が随意的に適用され、焦点要素 some wine 以外の要素がwh節内の要素 John bought との同一性のもとで削除され、SPCが派生される。IP節内の削除要素は、wh節の要素から復元可能である。

削除分析を支持する1つの証拠は、SPCの焦点要素とQAPの「返答」の平行性にある。QAPの「返答」として非定形のVPは可能であるが((7a)、定形は可能でない((7b))。同じ対比がSPCの焦点位置にも現れる((8a, b))。

- (7) a. What did John do? —**buy some wine.**
 b. What did John do? —*? **bought some wine.**

(den Dikken et al. 2000: 47)

- (8) a. What John did was **buy some wine**.
 b. *What John did was **bought some wine**. (den Dikken et al. 2000: 47)

この対比は、(9) の条件から導ける。この条件によれば、ある表現 A (「返答」等) が削除を経る場合、削除は焦点要素まで最大に適用されなければならない。

- (9) Maximality Condition on Ellipsis (den Dikken et al. 2000: 59)
 If A undergoes ellipsis, ellipsis must be maximal (all the way down to, but not into XP) [where ‘A’ is the answer/counterweight; and ‘XP’ is the focused constituent in A].

(10a) は、削除が主語と時制を含んだ要素まで最大にされている。一方、(10b) は、削除が主語にまでしか適用されていないため、(9) の条件に違反する。

- (10) a. What John did was ~~John~~_{T[+past]} **buy some wine**. (= (8a))
 b. *What John did was ~~John~~ T_[+past] **buy some wine**. (= (8b))

削除分析は、QAP との平行性ばかりでなく、SPC の重要な特徴を説明できる。第一に、SPC の wh 節が主語繰上げできないこと ((11a)) や ECM 補文の主語位置を占められないこと ((11b)) が捉えられる⁴。

- (11) a. *What John is* tends to be boring. (*SPC/PPC) (Higgins 1979: 305)
 b. *He considers *what John is* to be tall. (Higgins 1979: 316)

den Dikken et al. (2000: 64) は、(11a, b) の非文法性を、主語繰上げ動詞や ECM の補文において話題化ができないという事実 ((12a, b)) に起因させている。

- (12) a. *My friends tend *the more liberal candidates* to support.
 (Hooper and Thompson 1973: 485)
 b. *Police believe *the London area* the suspect to have left.
 (Haegeman 2012: 67, fn.20)

wh節が話題要素としてTopP指定部に基底生成するならば、(11)の非文法性の原因を、主語繰上げ動詞やECMの補文がTPであるためにwhat節が占めるTopPがないことに求めることができる。

さらに、削除分析は、wh節が主語助動詞倒置(SAI)を阻む事実((13a))も捉えることができる。

- (13) a. **Was* what Mary did to wash herself? (SPC) (Higgins 1979: 302)
 b. **Will* to Mary, John give the book? (den Dikken et al. 2000: 63)

(13b)が示すように、話題要素to MaryはSAIを阻む。den Dikken et al. (2000: 63)は、この事実を、話題要素が占めるTopPの上に助動詞が着地できる主要部がないためであると分析し、(13a)の非文法性も(13b)と同じようにTopPの上にコピュラの着地点がないためだと説明している。

さらに、SPCの焦点要素の移動が凍結される事実も説明できる。

- (14) *[pictures of Berlin]_i I think that [what John doesn't have] is t_i
 (den Dikken et al. 2000: 63)

den Dikken et al. (2000: 63)は、(14)の非文法性の要因をSPCのQAPの性質に求めている。焦点要素pictures of Berlinの移動によって残された痕跡(変項)は、wh節が表す「質問」に対する適切な返答とならない。ゆえに、(14)の非文法性が生じる。

ここまで、削除分析がSPCの重要な特徴を説明できることをみた。削除分析は、(i)焦点要素の根底にはIP節があることと(ii)wh節を疑問文の一種であることを主張する。次節では、これらの主張の妥当性を検証する。さらに、コピュラとwh節との時制の一致の説明に不備があることも指摘する。

2.2. 削除分析の問題点

2.2.1. 削除の不備

削除分析は、(4b)のようにSPCの焦点位置に完全なIP節があることを想定している。この種の文は、文法性に個人差があるが、口語では自然に発話されることがある(Higgins 1979: 86)。Lambrech (2001)は、この種の文を融合wh分裂文(amalgam wh-cleft)と呼び、通常の疑似分裂文と区別している。Koops and Ross-Hagebau (2008)やGuz (2015)は、融合wh分裂文と通常の疑似分裂文の相違を指摘している。第一に、融合wh分裂文ではwh節内の主語とコピュラに続くIP節の主語は同一でなくもよい((15))。一方、SPCは、wh節の主語とコピュラに後続する節の主語は同じでなくてはならない。(16)のtakeの主語は、wh節内の主語weとしか解釈されない。

(15) What **we** would do is, **they** would take care of the account maintenance.
(Koops and Ross-Hagebaum 2008: 463)

(16) What **we** would do is take care of the account maintenance.

さらに、wh節の時制と定形節の時制も同一でなくもよい((17))。

(17) What they **did** right is they **allow** a much wider variety of payment models,
(Guz 2015: 489)

削除分析は、IP節内の削除要素がwh節の要素から復元されることを前提としているので、IP節の主語と時制がwh節のものと同一であることを予測する。しかし、削除分析では、主語や時制が一致しないような上記の文をどのように派生するのが明らかでない⁵。

上記に加えて、(9)の削除条件にも不備がある。(9)は、焦点位置に不定詞標識toが現れる事実が説明できない((18)はHuddleston and Pullum (2002: 1422)より)。

(18) What you must do is (to) apply for special leave.

削除分析は、toを伴う(18)の文を(19)のような元の構造からyou must doを削除して派生する。

(19) What you must do is ~~you must do~~ to apply for special leave.

(9)の条件によると、削除は焦点要素まで最大に適用される。(19)の焦点はVP (apply for special leave) であるため、toが削除されないと(9)の条件に反する。削除分析は、toが必ず削除されると誤った予測をする。

2.2.2. SPCのwh節

次に、SPCのwh節が疑問文であるという主張を検証しよう。Akmajian (1970) や Zwicky (1986) が観察しているように、SPCのwh要素は疑問詞のwh要素と異なる振る舞いをする。第一に、疑問詞のwh要素はelseやthe hellを伴うことが可能であるが((20a, 21a)), SPCのwh要素は可能でない((20b, 21b))。

(20) a. **What else** he bought is not clear.

b. ***What else** he bought was a car. (Akmajian 1970: 75)

(21) a. I don't know **who the hell** put water in my gas tank.

b. ***What the hell** he finished was his thesis. (Zwicky 1986: 120)

SPCのwh要素が疑問詞であるという想定では、これらの相違を説明するのが難しい。

さらに、疑問詞のwh要素は前置詞の随伴が可能であるが((22)), SPCのwh要素は可能でない((23a, b))。

(22) I've just learned **from which city** she comes.

(23) a. ***To whom** one should give the application form is the registrar.

(Akmajian 1970: 77)

b. ***From where** she came was Albania. (Zwicky 1986: 122)

最後に、疑問詞のwh要素は名詞の随伴も可能であるが((24)), SPCの

wh 要素は可能でない ((25a, b))。

(24) I wonder **what/which lamp** you'd like.

(25) a. ***Which vole** John caught was that one. (Higgins 1979: 87)

b. ***What/*Which** bird Hennis noticed was an ivory spoonbill.

(Zwicky 1986: 117)

以上の相違は、SPCのwh要素が疑問詞とは異なる範疇であることを示している。wh節を疑問文と考えている削除分析は、これらの相違に自然な説明を与えるのが難しい。

2.2.3. 時制の一致

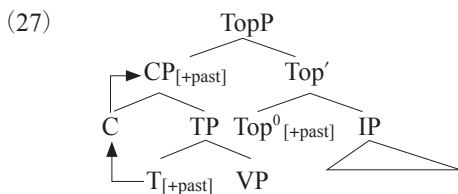
Akmajian (1970) が指摘しているように、コピュラとwh節の時制が同じである場合、PPCとSPCの両方の解釈が可能であるが((26a))、そうでない場合はPPCの解釈になる((26b, c))。SPCでは、コピュラとwh節の時制が一致していなければならない。

(26) a. What you **are** holding in your hand **is** a small brown butterfly with spots on its wings. (SPC/PPC)

b. What you **are** holding in your hand **was** a small brown butterfly with spots on its wings. (*SPC/PPC)

c. What you **are** holding in your hand **will be** a small brown butterfly with spots on its wings. (*SPC/PPC) (Akmajian 1970: 168)

den Dikken et al. (2000: 66) は、時制の一致は、TopP指定部のwh節と主要部のコピュラの間で得られる指定部・主要部一致 (Spec-head Agreement) の反映であると説明している。この説明を成立させるためには、(27) のようにwh節内でTがCに非顕在的に移動することで、時制素性がwh節全体に浸透すると想定しなければならない。



ただ、この説明は、なぜ時制素性がTからCに移動するのが不明である。さらに、現行の極小主義で破棄された指定部・主要部一致という概念に依拠している点でも望ましくない。

3. ラベル付け理論からの代案に向けて

2節では、削除分析の不備—(i) SPCの根底となる文に完全なIP節を仮定することの問題、(ii) SPCのwh要素が疑問詞でないことを支持する証拠、(iii) 時制の一致の説明に不備があること—をみた。本節では、これらの課題を克服できるようなSPCの派生をChomsky (2013, 2015) のラベル付け理論から探求していく。

3.1. wh節の構造

前節では、SPCのwh要素が、the hellやelseを伴うことができないことや前置詞や名詞を随伴できないことから、疑問詞と分析するのは適切でないと考えた。それでは、SPCのwh要素はどのような範疇なのだろうか。我々は、Akmajian (1970) や Iatridou and Varlokosta (1997) に従って、SPCのwh要素を自由関係詞と考える。というのも、SPCのwh要素は、the hell, else, 前置詞の随伴に関して、自由関係詞と同じ振る舞いをするからである((28))。

- (28) a. ***What the hell** she had in her hand sparkled. (Zwicky 1986: 119)
 b. ***What else** she had in her hand gave off the scent of amber.
 (Zwicky 1986: 117)
 c. *They ate **for what** they paid. (Quirk et al. 1985: 1060)

しかし、自由関係詞は名詞の随伴が可能であるが((29)), SPCのwh要素は(25a, b)で見たように随伴ができない。

(29) **What possessions I have are yours.** (Quirk et al.1985: 1059)

この相違は、SPCのwh要素が、自由関係詞と異なって、句でなく語であることを示唆する。

自由関係節の主要な分析には、wh要素を関係節全体の主要部とする主要部仮説(Bresnan and Grimshaw 1978, Citko 2002)と主要部は音声的に空の代名詞的要素が占めてwh要素はCPに移動するというComp仮説(Groos and Van Riemsdijk 1981)がある。最近の極小主義の枠組みでは、再ラベル化(relabeling)による自由関係節の有力な分析が提示されている(Ott 2011)。ここでは、Ott(2011)の分析を、Chomsky(2013)のラベル付け理論の観点からとらえ直し、それをSPCのwh節に拡張してみる。

Chomsky(2013, 2015)によれば、任意の構成素のラベルは、併合とは独立に、(30)のラベル付けアルゴリズム(Labelling Algorithm, 以後LA)によって決められ、LAは、任意のラベルから探索を開始して最短距離にある主要部がそのラベルになるという最小探索(minimal search)によって行われる。

- (30) a. $\{\alpha H, XP\}$
b. $\{XP \dots \{\alpha \langle XP \rangle, YP\}\}$, where $\langle XP \rangle$ is XP's copy
c. $\{\alpha_{\leftarrow F, F} XP_{[F]}, YP_{[F]}\}$

(30a)のようにHが主要部で、XPが句である場合は、LAはHを α のラベルとする。なぜなら、Hが α に最も近い主要部であるからである。しかし、句と句が併合した $\{\alpha XP, YP\}$ の場合、XとYのいずれも α に最も近い主要部であるから、ラベルが決まらない。ここで、Chomskyは、(30b)の内的併合と(30c)の素性共有の2つの解決案を示した。1つは、XPとYPのうち一方が移動すると、残った他方の要素の主要部がラベルとなる(この場合、移動元のコピーは無視される)。もう1つは、XPとYPが最も顕著な素性を共有(share)した場合、それ自身がラベルとなる。

ラベル付け理論の観点から、Ott (2011) の自由関係節の分析を再考する。彼は、自由関係詞は、Comp 仮説と同じように、CP 指定部に内的併合すると想定し、さらに、疑問のCPのCは、解釈可能なQ素性を担っているが、自由関係節のCPのC_{FR}は、解釈可能な素性を欠如すると仮定する。これらを踏まえて、LAをもとに疑問節と自由関係節の派生を考える。疑問のwhatがCPに内的併合した場合((31))、DPとCPの主要部のどちらもが α に最も近いものになる。素性共有によって、共有されたQ素性が α のラベルとなる。

(31) [_{VP} wonder [α =<Q, Q> [_{DP} what_Q]_i, [_{CP} C_Q]] [_{TP} you T cook t_i]]

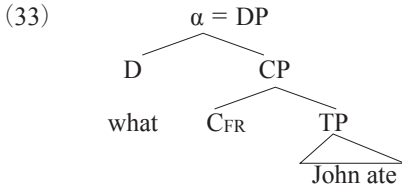
一方、自由関係詞whatがCPに内的併合した場合((32))、C_{FR}とDが共有する素性が存在しないので、素性共有でラベルは決められない。一方、whatをさらに上記の投射に内的併合させた場合、関係節のラベルはCPとなる。しかしこれは、自由関係節が名詞的振る舞いをする事実と反する。ここでOtt (2011: 186) に従って、意味解釈に関わらないフェイズ主要部は、補部とともに転送 (transfer) されると仮定する (転送部分を網掛けで表している)。

(32) [_{VP} eat [α [_{DP} what]_i, [_{CP} C_{FR}]] [_{TP} you T cook t_i]]

C_{FR}の転送は、CPのラベルをワークスペースから取り除き、whatのみがLAに可視的になる。DPのDが最も近い主要部となり、関係詞節がDPとラベル化される。この結果、自由関係節が節でありながら名詞句として振舞うことが捉えられる。また、C_{FR}やwhatには、Q素性がないため、疑問文に特有なthe hellやelseが認可されないことも説明される。

上記のラベル付け分析は、このままSPCのwh節に拡張できない。なぜなら、(25)が示すように、SPCのwh要素は、自由関係詞と違って語であるからである。ここで、wh要素の派生に2つの方法が考えられる。1つは、wh要素を語としてCP指定部に内的併合することである。もう1つは、上記の主要部仮説に従って、wh要素は、語としCPに外的併合することである。前者の想定は、一般にwh移動する要素が語でなく句であるという一般化に反する。従って、ここでは後者を提案する。(33)のように、wh要素

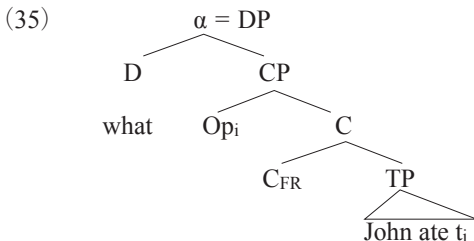
がDとしてCPに外的併合すると、DがCPの主要部よりも α に近くなるので、Dが α のラベルになる。



ただ (33) のままでは、wh節内に前置詞が残留する事実 ((34)) を捉えることができない。前置詞残留は、何らかの要素の移動によって前置詞が元の位置に残される現象である。従って、wh節の派生には何らかの移動を想定する必要がある。

(34) Where she came **from** was Albania. (Zwicky 1986: 122)

ここでは、空演算子 (Op) の移動を仮定する。(35) のようにOpはCP指定部に内的併合し元の位置に変項を残し、この変項がOpにA'束縛されると解釈される。wh節は真理値の決まらない変項をもった開放命題となる (Akmajian 1970, Higgins 1979)。この変項の値が焦点要素に指定されることで真理値が決まると考えることができる。



この分析は、wh要素が前置詞を随伴できない事実 ((23a, b)) とも整合する。一般に、空演算子は (36) の対比が示すように前置詞を随伴できない。

- (36) a. the boy [_{CP} Op_i that John talked to t_i]
 b. *the boy [_{CP} to Op_i that John talked t_i]

従って、(35)のようにwh節の派生にOpの移動を想定するならば、(23a, b)の非文法性は、Opが前置詞を随伴できないという制約に帰することができる。

3.2. SPCの派生

3.1節では、ラベル付け理論の観点から、wh要素を関係節全体の主要部とするwh節の構造を仮定した。次に、我々はラベル付け理論をもとに、SPC全体の構造がどのように派生されるのかを考えなければならない。

2節では、SPCの焦点要素がIP節からの削除を経て派生されることの問題をみた。この問題を避けるために、我々は削除の操作を想定しない。Willimas (1983)に従って、SPCは、派生の初期段階で焦点要素とwh節が主述関係にある小節を形成すると考える((37))。

- (37) [SC [Subject some wine] [Predicate what John wanted]]

wh節が述語である1つの証拠は、SPCのwh要素は、自由関係詞と異なり-everを付加できないことである。

- (38) *Whatever John is proud. (SPC) (Iatridou and Varlokosta 1998: 11)
 (cf. Whatever John is worthwhile/rare. (PPC))
 (39) *John is every teacher in this class.

一般に、自由関係詞は-everを伴うことができるので、(38)の非文法性は、SPCのwh要素が自由関係詞であるという3.1節の結論に反すると思われる。しかし、SPCのwh要素を自由関係詞と考えたとしても(38)の非文法性は-everの意味に起因させることができる。-everが付加した自由関係詞は、-everのない関係詞と異なり、普遍数量詞を伴う名詞句と解釈されることが知られている(Bresnan and Grimshaw 1978: 355)。また、そのような名詞句は、(39)のように述語として機能できない。従って、(38)の非文法性は、

whatever John isの全体が述語であるならば、普遍数量詞の名詞句が述語になれないという制約((39))に帰することができる(Iatridou and Varlokosta 1998: 11)。

焦点要素が主語であることは、wh節と倒置して主語位置に生起できることから支持が得られる。

- (40) a. **Important to himself** seems to be what John is. (Williams 1983: 428)
 b. **In the morning** is where I do my best work. (Huddleston and Pullum 2002: 1420-1422)
 c. **Explain the use of WH-cleft** is what he should do. (Lambrecht 2001: 499)
 d. **To cause any harm** is what he refuses. (Schlenker 2003: 212)

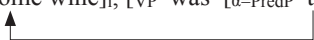
(40)の各文では、AP, PP, VP, TPである焦点要素がそれぞれ主語位置に生起している。この事実は、焦点要素の主語性を裏付ける。

以上の観察をもとに、SPCの根底に焦点要素とwh節が主述関係を成す小節を想定する。Bowers (1993)に依拠して、小節は、叙述を認可する機能範疇Predを主要部とするPredPであると仮定する。まず、wh節がPredと外的併合し、[PredP Pred [DP]]を形成する。続いて、焦点要素が(41)のように外的併合して小節構造を作る。

(41) [α ? [DP some wine], [PredP Pred [DP what John bought]]]

DP (some wine) とPredPの主要部が α から等距離であるため、 α のラベルが決まらない。ここで、自由併合に従って、(42)のようにsome wineが上位のVP指定部に内的併合すると仮定しよう。この結果、 α の最も近い主要部はPredとなり、ラベルはPredPと決まる。

(42) [β [DP some wine]_i, [VP was [α =PredP t_i Pred [DP what John bought]]]]



次に、 β のラベルが必要になる。VPとDP (some wine) の主要部が共有する素性として ϕ 素性を想定できるかもしれないが、そう考えるのは難しい。というのも、(43)の対比が示すように、SPCのコピュラは後続の名詞句と一致しないからである。

- (43) a. What you have bought **is** fake jewels. (SPC)
 b. What you have bought **are** fake jewels. (PPC) (Declerck 1988: 80)

この事実は、SPCのコピュラの ϕ 素性の値が、名詞句とのAgreeによって付与されないことを示している (Bošković 1997: 267)。従って、コピュラとそれに後続する名詞句が ϕ を共有すると想定するのは難しい⁶。仮に ϕ 素性の共有を想定したとしても、コピュラに続く要素が ϕ 素性を欠くAPや不定詞節であるSPC ((1) や (18)) には異なる想定をしなければならないので、統一的な説明ができないことなる。 β のラベル付けには、コピュラに続く要素の範疇に関わらず成り立つ想定が必要である。

我々が着目するのは、コピュラ後の要素は、範疇に関わらず焦点を表すことである (Akmajian 1970, Higgins 1979, Prince 1978, Lambrecht 2001)⁷。このことから、コピュラ後の要素は、焦点素性 (Foc) を担うと想定し、SPCのコピュラも後続する要素を焦点化する素性 (Foc) を内在的にもつと仮定する⁸。この想定があれば、 β は、(44)のようにVとDがFoc素性を共有し、<Foc, Foc>のラベルが付与される。

- (44) [β =<Foc, Foc> [DP some wine]_i, [VP be [α =PredP t_i Pred [DP what John bought]]]]

次に、wh節の派生を考える。SPCのwh節は、談話から予測される旧情報を表し、談話の話題 (discourse topic) を表すことが知られている (Prince 1978, Declerck 1988)。そこで、SPCのwh節は、話題の解釈を得るため左周辺部のTopPに内的併合すると提案する (Rizzi 1997)⁹。削除分析もラベル付け分析もwh節がTopP指定部を占める点で共通するが、前者はwh節をTopP指定部に外的併合させているが、我々は、TopPに内的併合すると考える。

- (47) A-positions provide the basis for core semantics: θ -and argument positions.
A'-structures are discourse-and information-related.

(Chomsky 2021: 29)

(47) によれば、A 位置は項構造や意味役割に関係するのに対して、A' 位置は、談話情報に関係する。従って、some wine が占める焦点位置は、談話情報に関係するため A' 位置とみなすことができ、wh 節の TP 指定部への A 移動は RM の違反を誘発しないと考えられる。

4. ラベル付け分析の検証

前節では、削除分析の不備を踏まえて、削除に依拠しないラベル付け分析を提案した。それでは、この分析は、2 節でみた SPC の特徴を捉えることができるか、検証してみる。

4.1. SAI の不可能性

削除分析は、SAI の不可能性 ((13a), (48) に再掲) の原因を、TopP の上位に助動詞が着地できる主要部がないこと ((49) に求めている。

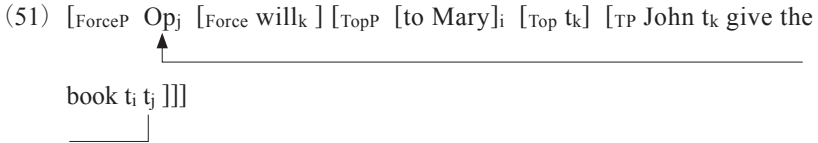
- (48) *Was *what Mary did* to wash herself? (= (13a))
(49) *Will *to Mary*, John give the book? (= (13b))

ただ、TopP の上位に助動詞の着地点がないことには疑問の余地がある。Rizzi (1997) の分離 CP 仮説では、話題要素が占める TopP の上位に、文のタイプを表す ForceP がある (注 9 を参照)。従って、(49) の will は、Force に着地できる可能性がある。

この問題を回避するため、Haegeman (2012: 221-222) に従って、yes/no 疑問文は、疑問の空演算子 (Op) が CP 指定部に移動することによって派生されると想定する (cf. Radford 2018: 185)。これは、(50a) の yes/no 疑問文に (50b) のような概略的な構造を付与する。

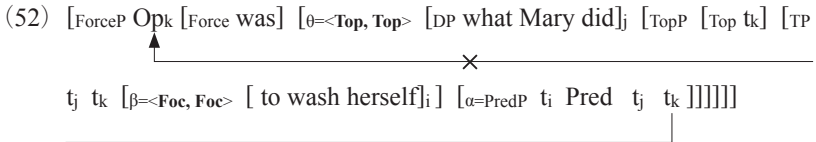
- (50) a. Had he said that he would leave?
 b. [_{CP} Op_i [c had_j] he t_j said [that he would leave t_i]]

この分析を(49)に適用すると、(49)は、(51)のような概略的な構造が付与される(willはTからTopを経由してForceに移動すると仮定する)。



ここで、矢印で示した空演算子移動は、TopP指定部を占めるto Maryを飛び越しているためRMの違反を誘発している。よって、(49)の非文法性が生じる。

上記の空演算子分析があれば、ラベル付け分析は、(48)の非文法性をRMの違反として捉えることができる。(48)は(52)のように派生される。



空演算子移動は、(51)と同じように、wh節のTopP指定部を飛び越しているためRMの効果を起こし、(48)の非文性を正しく予測できる。

4.2. 焦点要素の凍結性

削除分析は、(14)の焦点要素の凍結性((53)に再掲)をQAPとの関係によって捉えたが、ラベル付け分析は、Rizzi (2015)が提案する(54)のMaximalityによって原理的に説明できる。Rizziは、XPとYPが素性共有によってラベル付けされると、それ以前は最大投射であったXPやYPが中間投射に格下げされると想定し、移動できる要素は最大投射の句だけであることを主張した。

(53) *[pictures of Berlin]_i I think that [what John doesn't have] is t_i. (= (14))

(54) Maximality

Phrasal Movement can only involve maximal objects with a given label.

(Rizzi 2015: 22)

ラベル付け分析では、(53) は (55) のように派生される。

(55) [_θ=<Top, Top> [DP what John doesn't have]_j, [_{TopP} Top [_γ=TP t_j is_k [_β=<Foc, Foc> [DP pictures of Berlin]_i], [_{VP} t_k [_α=PredP t_i Pred t_j]]]]]]]

焦点要素 pictures of Berlin は VP に内的併合された後に、β に <Foc, Foc> が付与される。その結果、焦点要素は最大投射でなくなり、さらなる内的併合は (54) の原理から阻まれる。

4.3. 主語繰り上げと ECM の不可能性

den Dikken et al. (2000) は、(11) ((56) に再掲) の非文法性を、話題化が主語繰り上げ補文や ECM 補文で阻まれるという独立した事実 ((12a, b)) に求めた。

(56) a. *What John is* tends to be boring. (*SPC/PPC) (= (11a))


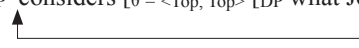
b. *He considers *what John is* to be tall. (= (11b))

しかしこの説明はあまり納得いくものでない。なぜなら、話題化がなぜ上記のような補文で阻まれるのかについて明確な答えを与えていないからである。

我々は、Radford (2018: 71) に従って、話題要素は、定形 (finite) の Force に局所的に c 統御されなければならないと仮定する。この条件は、話題化が主語繰り上げ補文や ECM 補文で不可能であること ((12a, b)) を明確に捉える。これらの補文は、非定形であるため、定形の Force を含まない投射である。従って、これらの補文内で話題要素が TopP に内的併合したとしても定形の Force に局所的に c 統御されず、非文法性が生じる。

この条件があれば、ラベル付け分析は (56) の非文法性を明確に説明で

きる。我々の分析では、(56a)と(56b)は概略それぞれ(57a)と(57b)のように派生される。

- (57) a. [TP tends [$\theta = \langle \text{Top}, \text{Top} \rangle$ [DP what John is]_j, [$\gamma = \text{TP to be } [\beta = \langle \text{Foc}, \text{Foc} \rangle$

 [AP boring]_i, [VP [$\alpha = \text{PredP } t_i \text{ Pred } t_j$]]]]]]
 b. He [VP considers [$\theta = \langle \text{Top}, \text{Top} \rangle$ [DP what John is]_j, [$\gamma = \text{TP to be } [\beta = \langle \text{Foc},$

 $\text{Foc} \rangle$ [AP tall]_i, [VP [$\alpha = \text{PredP } t_i \text{ Pred } t_j$]]]]]]

いずれの派生においても、wh節が補文内のTP指定部を経由しTopPに内的併合することで、SPC全体が $\langle \text{Top}, \text{Top} \rangle$ とラベル付けされる。(57a)において、wh節が主節TPに内的併合することで(矢印が移動を表す)、主節の定形のForceに局所的にc統御される可能性がある。しかし、いったんSPC全体が $\langle \text{Top}, \text{Top} \rangle$ と付与されると、wh節は中間投射に格下げされ、さらなる移動は(54)の原理から阻まれる。従って、(57a)の派生は破綻する。(57b)のwh節も、主節のVPに内的併合し(矢印が移動を表す)主節のForceに局所的にc統御されるかもしれないが、この移動も(57a)と同じ理由で排除される。

4.4. QAPとの平行性

削除分析は、(8)の対比((58)に再掲)を(9)の削除条件から導くことができた。削除を仮定しないラベル付け分析は、この対比を削除条件に依拠せず説明しなければならない。

- (58) a. What John did was **buy some wine**. (=(8a))
 b. *What John did was **bought some wine**. (=(8b))

(58b)のbought some wineは、主語のない定形節になっている。この単語列は(59)のように時制要素を含むTがVPを補部を取る中間投射T'と考えられる(Radford 2009: 45)。Tの時制素性(接辞)がすぐ下のbuyに音韻部門で付加することでboughtと発音される。

(59) [_T [_T [_{+past}]] [_{VP} buy]]

我々の分析は、 β のラベル付けのため *bought some wine* が VP に内的併合すると仮定する。

(60) [β [*bought some wine*]_i [_{VP} be [_{α =PredP} _{t_i} Pred [_{DP} what John did]]]]]

しかし、*bought some wine* は中間投射であるため、(60)の内的併合は(54)の原理によって阻止される。一方、(58a)の *buy some wine* は最大投射 VP であるため、VP に内的併合することは可能である。

さらに、ラベル付け分析は、削除分析で問題となった *to* の出現も捉えることができる。

(61) What you must do is (to) *apply for special leave*. (= (18))

(61)の *to apply for special leave* は、最大投射 TP であるため、VP に内的併合することが可能である。

4.5. 時制の一致

最後に、ラベル付け分析が(26)の時制の一致をどのように説明するのかを考える。(26b)を(62)に再掲する。

(62) What you **are** holding in your hand **was** a small brown butterfly with spots on its wings. (*SPC/PPC) (= (26b))

den Dikken et al. (2000: 66) は、時制の一致を、TopP 指定部の *wh* 節と主要部のコンピュータの間に成り立つ指定部・主要部の一致の結果であると説明した。しかし、この分析は、*wh* 節の時制素性が T から C に非顕在的に移動するという補助的な仮説に依拠していた点で、その場しのぎの感じが否めない。

我々の分析は、もう少し原理的に時制の一致を捉えることができる。SPC は、*wh* 節が TopP に併合する前に(63)のような概略的な構造をもつことになる。

- (63) [TP [T {+past} be] [β =<Foc, Foc> [some wine]_i] [VP [α =PredP t_i Pred [DP what
 John [T {+past}] buy]]]]] Agree

この時点で、VからTに移動したコピュラは、wh節のTをc統御し、Tの時制素性とAgreeすることで時制の値(+past)が付与される。音韻部門で+pastの素性がbeに付加しコピュラはwasと発音される。これによって、コピュラとwh節の時制が一致する事実が捉えられる。

5. 連結性の問題

ラベル付け分析は、SPCの根底にIP節を含む文を想定していないため、(2)の連結性を説明することが難しい。例えば、(2a)は(64b)のように派生される。

- (64) a. What **John** saw in the mirror was **himself**. (= (2a))
 b. [θ =<Top, Top> [DP what **John** saw...]_j, [TopP Top] [γ =TP t_j was_k [β =<Foc, Foc> [DP **himself**]_i, [VP t_k] [α =PredP t_i Pred t_j]]]]]

(64b)の派生のどの段階でも、himselfはwh節に埋め込まれたJohnによってc統御されない。従って、ラベル付け分析は(64a)の文法性を予測できない。

この問題の解決案として、Chomsky (2021)のコピー形成の操作(Form Copy)を援用する。Chomskyは、コピー関係が内的併合を経た2つの要素の間に付与されるばかりでなく、外的併合により独立に導入された2つの要素の間にも付与されることを提案している。Chomsky (2021: 35)は、この関係をM空所(Markovian-gap)と呼び、空演算子を用いずに寄生空所構文を分析している。

- (65) a. what₁ did John file what₂ [what₃ without reading what₄]
 b. what₁ did John file what₂ [what₃ without reading what₄]

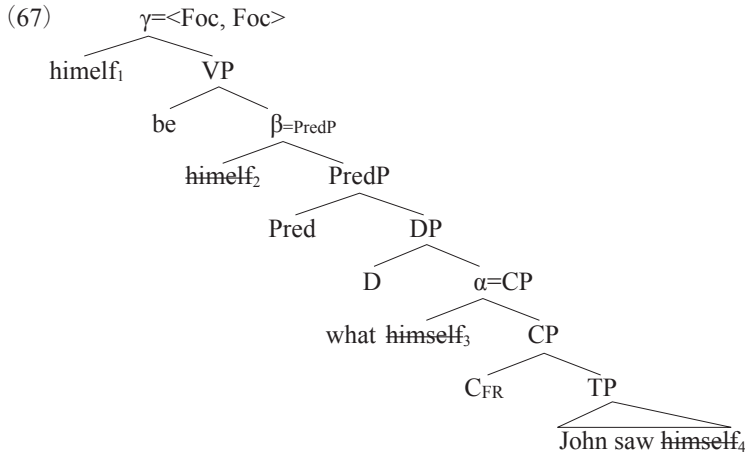
what は、(65a) のように、主節動詞 file の補部に、付加部の動詞 reading の補部にそれぞれ外的併合される。what₂ は主節の CP 指定部に内的併合し (what₁)、what₄ は付加部の指定部に内的併合する (what₃)。コピー形成が what₁ と what₂ の関係と what₃ と what₄ の関係にそれぞれ適用され、what₂ と what₄ が削除される。さらに、(65b) のように what₁ と what₃ は、同一のフェイズ内にあるので、M 空所として両者にコピー形成が適用され、what₃ が削除される。what₁ と what₃ を M 空所と見なすことで、wh 要素が付加部の島から移動しているように見える現象を説明できる。

(65b) の what₂ と what₃ の関係にもコピー形成が適用されると思われるかもしれないが、これは、コピー形成が A 位置 (what₂) から A' 位置 (what₃) へと適用されているため、(66) の条件に反する。

(66) From an A position, FC searches A positions. (Chomsky 2021: 28)

この原理は、コピー形成は A 位置から A 位置へと行われることを規定したもので、A' 位置から A 位置への非適切移動 (improper movement) を排除する。

コピー形成の操作を踏まえて、SPC の分析に移る。我々は、wh 節に空演算子が CP 指定部に内的併合すると仮定した。ここで、コピー形成の観点から、内的併合しているのは空演算子でなく焦点要素と考え、焦点要素 (himself) は、wh 節内の動詞の補部に、主節の PredP の指定部にそれぞれ外的併合されると想定する。(2a) は、派生が焦点要素の内定併合まで進んだ時点で次の構造が付与される。



wh節内の himself₄は、空演算子のようにCP指定部に内的併合する。コピー形成が himself₃と himself₄に適用され himself₄が削除される。 himself₂は、PredPに外的併合した後、βのラベルを決めるためにVPに内的併合する。コピー形成が himself₁と himself₂に適用され himself₂が削除される。フェイズをvPとCPであると仮定すると(Chomsky 2000)、 himself₁と himself₃は同一のフェイズにあると考えられる¹¹。 himself₃はフェイズCPの端(edge)にあることに注意されたい。両者にコピー形成が適用されて himself₃が削除される。

(67)において、 himself₄がwh節内で先行詞Johnにc統御されるので、本分析は(2a)の適格性を予測できる。(2b)の束縛代名詞と(2c)のNPIについても同じ説明が成り立つ。我々は、削除を仮定することなく、外的併合により独立に導入された2つの焦点要素の間にコピー関係が付与されると考えることで、(2)の連結性を捉えることができる。

6. 結語

本稿では、den Dikken et al. (2000)の削除分析の不備を指摘し、Chomsky (2013, 2015)のラベル付け理論の枠組みでSPCのラベル付け分析を提案した。この分析は、wh節が話題要素としてTopPを占める点で削除分析と共

通しているが、SPCが焦点要素とwh節が主述関係を形成する小節を根底にするという点、焦点要素がVPに内的併合する点で異なる。この分析が、削除分析の不備を解消し、SPCの重要な特徴に自然な説明を与えることを示した。さらに、Chomsky (2021) のコピー形成を援用することで、外的併合により独立に導入された2つの焦点要素の間にコピー関係が付与されると提案した。この提案は、削除を仮定することなく、連結性を説明できる可能性を示した。ただし、コピー形成には理論的に不明確な点があり、当分析には更なる理論的精緻化と経験的検証が必要である。

注

1. (4b) のような文の文法性には、個人差があるが、話し言葉では容認される (Higgins 1979: 86, den Dikken 2006: 3342)。 (4b) から SPC を派生する問題については 2.2.1 節を参照。
2. Bošković (1997: 256) は、連結性を LF での再構成化 (reconstruction) によって捉えようとしている。彼は、wh 要素を表層照応 (surface anaphor) と見なし、LF で焦点要素 himself によって置換 (replace) されると提案する。例えば、置換によって (ia) から (ib) の LF 表示が得られる。
 - (i) a. [what]_i John saw [what]_i in the mirror was [himself]_i.
 b. John saw [himself]_i in the mirror was [himself]_i.
 (ib) では、what を置換した himself は John によって c 統御されるので、束縛原理 A を満たす。ただし、(ib) の表示において himself が what を置換したとしても、himself が元の位置に残したコピーを c 統御できない問題が生じる (他の問題については den Dikken (2006: 392-394) を参照)。
3. この考えは、SPC のコピュラがコロンのように項目列举 (listing) の機能を果たし、同一性 (identity) を表すという主張 (Akmajian (1970), Higgins (1979)) と異なる。Higgins (1970) は、(ia) の SPC は、(ib) のような意味表示をもつと分析している。(ib) のイコール記号がコピュラの同一性を表す。
 - (i) a. What we saw in the park was a man and a woman.
 b. {x: we saw x in the park} = {a man, a woman} (Higgins 1979: 191)
 本稿も、Akmajian (1970) 等に従って、コピュラは同一性を表すと想定する。
4. Higgins (1979: 315) は、SPC のコピュラは定形 (finite) でなければならないと述べている。コピュラが非定形の being である (i) は非文となる。もしこれが正しければ、(11a, b) の非文法性の原因を、コピュラが非定形であることに求めることができるかもしれない。
 - (i) *What John was being sulky, we left him alone. (Higgins 1979: 316)

5. 査読者が指摘するように、(15) から (17) は SPC と異なる派生を許す可能性があるので、削除分析の強い反例にはならない。この問題は今後の課題としたい。
6. 査読者が指摘するように、コンピュータが後続する名詞句を Agree しないならば、その名詞句にどのように格の値が付与されるのかという疑問が残る。ここでは、名詞句は Agree とは独立して下記の条件によってデフォルト格が付与されると想定する。

(i) Default Case Assignment Condition (Radford 2016: 216)

A noun or pronoun expression which does not fall within the domain of (i.e., which is not c-commanded by) any case-assigner receives default case. コンピューラに後続する名詞句は、いかなる格付与詞によっても c 統御されないので、(i) の条件によってデフォルト格の値 (対格) が付与されると考える。

7. コンピューラ後の要素が焦点であることは、Higgins (1979: 300-302) が観察しているように、それが削除できないことから裏付けられる。

(i) *What John is is proud of himself and what Mary is is __too.

一般に焦点要素は文にとって重要な情報を伝えるため削除できない。そのため、焦点の proud of himself が削除された (i) は非文となる。

8. 査読者が指摘するように、この仮説が SPC のコンピュータのみに適用されるならば、その場しのぎである。ただ、コンピュータが焦点化標識であることは、(i) のような 2 重コンピュータ構文 (double-is construction) でも提案されている。Massam (1999) によれば、(i) の 2 番目のコンピュータが後続する構成素を焦点化する。

(i) The thing is, is [we've got to be strong].

9. 我々は、Rizzi (1997) の CP 分離仮説に従って、CP を下記のように別個の機能範疇に分離されると仮定する。

(i) [ForceP Force [TopP Top [FocP Foc [FinP Fin ...

Rizzi (1997) は、話題要素は TopP 指定部に移動し、そこで指定部・主要部一致によって規準 (criterion) を満たすと考えている。ラベル付け理論では、指定部という概念が存在しないので、話題要素は Top のような素性を持ち、それと同じ素性を持つ TopP の主要部と素性共有をして、<Top, Top> とラベル付けされる。

10. 査読者は、SPC の T が ϕ を持つならば γ のラベルは $\langle \phi, \phi \rangle$ となって DP の TopP への移動は (54) の原理に阻まれる可能性を指摘している。ただ、SPC の T、すなわちコンピュータは、独立した時制をもたないことや ((26)) 数の一致を示さないこと ((43)) を考慮すると、その ϕ 素性の値が Agree によって決定されるとは考えにくい。我々は、SPC の T の ϕ 素性はデフォルト値 (3 人称単数) を反映した結果だと考える (Bošković 1997: 267)。具体的には、Abe (2018:

105) の提案に従って, Tは転送の直前に最終手段の操作としてデフォルトの値(3人称単数)が付与されると仮定する。また, コピュラの時制の値については, wh節の時制との Agree関係で外在的に決まると考える。この点に関しては4.5節で考察する。

11. (46) で論じたように, himself_i が占める焦点位置は A' 位置であることに注意されたい。もし (67) の himself_i が A 位置であるなら, A 位置から A' 位置へとコピー形成が行われているため, (66) の原理に反する。

参考文献

- Abe, Jun (2018) “How to Probe Expletives.” *Studia Linguistica* 72: 76-112.
- Akmajian, Adrian (1970) *Aspects of the Grammar of Focus in English*. Doctoral dissertation, MIT.
- Bošković, Željko (1997) “Pseudoclefts.” *Studia Linguistica* 51: 235-277.
- Bowers, John (1993) “The Syntax of Predication.” *Linguistic Inquiry* 24: 591-656.
- Bresnan, Joan, and Jane Grimshaw (1978) “The Syntax of Free Relatives in English.” *Linguistic Inquiry* 9: 331-391.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework.” In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.), *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155, Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection.” *Lingua* 130: 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projections, Extensions.” In Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini (eds.), *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, 3-16, Amsterdam: John Benjamins.
- Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go.” *Gengo Kenkyu* 160: 1-41.
- Citko, Barbara (2002) “(Anti) Reconstruction Effects in Free Relatives: A New Argument against the Comp Account.” *Linguistic Inquiry* 33: 507-511.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*. Dordrecht: Leuven University Press.
- Dikken, Marcel den, André Meinunger and Chris Wilder (2000) “Pseudoclefts and Ellipsis.” *Studia Linguistica* 54: 41-89.
- Dikken, Marcel den (2006) “Specificational Copular Sentences and Pseudoclefts.” In Everaert, Martin, and Henk Van Riemsdijk (eds.), *The Blackwell Companion to Syntax*, 292-409, Malden, MA: Blackwell.
- Groos, Anneke, and Henk van Riemsdijk (1981) “The Matching Effects in Free Relatives: A Parameter of Core Grammar.” In Adriana Belletti, Luciana Brandi, and Luigi Rizzi (eds.) *Theory of Markedness in Generative Grammar*, 171-216,

- Pisa: Scuola Normale Superiore.
- Guz, Wojciech (2015) "The Structural Non-integration of *Wh*-clefts." *English Language and Linguistics* 19: 477-503.
- Hageman, Liliane (2012) *Adverbial Clauses, Main Clause Phenomena, and the Composition of the Left Periphery: The Cartography of Syntactic Structures*. Oxford: Oxford University Press.
- Higgins, Francis Roger (1979) *The Pseudo-Cleft Construction in English*. New York: Garland.
- Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson (1973) "On the Application of Root Transformations." *Linguistic Inquiry* 4: 465-497.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Iatridou, Sabine and Spyridoula Varlokosta (1998) "Pseudoclefts Cross-linguistically." *Natural Language Semantics* 6: 3-28.
- Koops, Christian, and Sebastian Ross-Hagebaum (2008) "Information Structure and Discourse Function of Amalgam *Wh*-Clefts." In Sarah Berson, Alex Bratkievich, Daniel Bruhn, Amy Campbell, Ramon Escamilla, Allegra Giovine, Lindsey Newbold, Marilola Perez, Marta Piqueras-Brunet and Russell Rhomieux. (eds), *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 461-72.
- Lambrecht, Knud (2001) "A Framework for the Analysis of Cleft Constructions." *Linguistics* 39: 463-516.
- Massam, Diane (1999) "Thing is Constructions: *The Thing Is*, Is What's the Right Analysis?" *English Language and Linguistics* 3: 335-352.
- Ott, Dennis (2011) "A Note on Free Relative Clauses in the Theory of Phases." *Linguistic Inquiry* 42: 183-192.
- Prince, Ellen (1978) "A Comparison of *Wh*-clefts and *It*-clefts in Discourse." *Language* 54: 883-906.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, Andrew (2009) *An Introduction to English Sentence Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (2016) *Analyzing English Sentences: A Minimalist Approach*, 2nd. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (2018) *Colloquial English: Structure and Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery.” In Liliane Haegeman (ed) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281-337, Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, Luigi (2015) “Notes on Labeling and Subject Positions.” In Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini (eds.), *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, 17-46, Amsterdam: John Benjamins.
- Schlenker, Philippe (2003) “Clausal Equations: A Note on the Connectivity Problem.” *Natural Language and Linguistic Theory* 21: 157-214.
- Williams, Edwin (1983) “Semantic vs. Syntactic Categories.” *Linguistics and Philosophy* 6: 423-446.
- Zwicky, Arnold M. (1986) “WH Constructions in English.” *Working Papers in Linguistics* 32: 114-124.

(Wakayama University)
matsuya@wakayama-u.ac.jp